**次の段階 2017 4 23**

**ヨハネ 20:19-31 スティンストラ牧師**

復活日から一週間経った。マリアは復活日の朝に墓が空っぽになったことを発見し、驚きのイエスと出会いがあり、そしてイエスから授かったすばらしく卒倒するようなニュースを弟子たちに伝えたにも関わらず、さらに弟子たちは復活日の夕刻にイエスに会ったにも関わらず、弟子たちはなんら変わった兆候を見せていなかった。　喜び溢れ、またイエスの驚くべき出現に慰められたとして行動を開始するのではなく、鍵のかけられた薄暗い部屋の中にこもって、７日の間、彼等はいったい弟子に選ばれたということが祝福だったのかどうか思い巡らせていた。それは私が応援しているサンフランシスコジャイアンツがどうも調子が良くなさそうだと思いめぐらせているのと似ている。

部屋に閉じこもっているみじめな弟子たちの顔には、ただ神経を麻痺させてしまう体験からくる苦悩の表情しかなかった。イエスが逮捕されてからは、彼等は無力で狼狽した状態のままで、彼等の将来に暗雲が立ち込めているということしか、考えることができなかった。復活日の偉大なる奇跡の機序についてわかろうとするものの、墓が空っぽになったという事実は彼等を不安から解放させる状態にはしていなかった。

そして皆、同じ場所で窮屈な窓の無い空間で気の抜けた空気を吸っていた。何世紀にも及ぶキリスト教の歴史において、死と墓に対する救い主の勝利の話をする際、私たちはとかくトマスをすばらしいニュースに疑いを抱いた罪深い弟子として指摘してきた。しかしトマスと他の弟子たちとの本当の違いは、不信仰ということではない。ただ一週間前の日曜の夕方に主イエスが顕われたときに、トマスがたまたまいなかったということに過ぎない。復活した主がはじめて顕われたあとも、確信を持てない状況が続いた弟子たちだって、イエスにおける兄弟トマスに比べ輝かしい弟子たちだなどとは言えるものではない。世界の現実というプレッシャーに一週間さらされただけで、どの弟子たちも忘れ得ない神の力の体験であるべきだったのに、その体験に疑惑をいだいていた。　現実的で常識的なトマスはおそらく疑念をいだいた質問を素直に声に出して言うことが可能だったのだと思うが、彼の不信感は他の弟子たちとの会話の中から明らかだった。聖書箇所の中に出てきている弟子たちの中には、誰一人として信仰が強いとして誉めるに値するような弟子はいなかった。彼等は全員、主が十字架に釘付けにされたが実際に健康に生きているという十分で確固たる証拠を探しており、彼等の信仰の旅路として、不安・不信仰の状態から抜け出して、確信を持てる次の段階へと進みたいと思った。

彼らは自分たちを大きく変える力のある復活したイエスと会うという体験をこの上なく必要としていたのに、まるでイエスはもう二度と現れないかのように考えていた。というより一週間前に震えていた弟子たちに赦しの言葉を述べたイエスがまた戻ってきてくださるなどとは考えることもできず、また一週間前に現れたこと事態も信じらずにいた。彼等の高まってきた疑いは、しかしながらドアの鍵が彼の出現に対して効果を発揮しなかったわけで、彼等の疑いも鍵以上に効果がないことがわかってきた。復活の主は、主ご自身のやり方で顕われてくださる、それは主が選ばれる時、まさに疑いや恐れの真っ只中にある弟子たちに、憐れみとともに彼等を驚かせるために、また信じるようにと招くために、鍵のかかった部屋に忍び込んでこられる。　主が愛する人々とは離れてしまうことを望まれず、主の道を妨げるものに対して一切じゃまされることなく、主は人々が欲するところの平安を一人一人に与え、彼等が豊かに生きることができるように顕われてくださる。

イエスは弟子たちの誰に対してもあきらめてしまうことはないし、現代を生きる私たちに対しても決してあきらめてしまうことはしない。イエスは、2000年前に閉ざされたドアの中で縮こまっていた弟子たちと究極的にはなんら変わらない現代のイエスの迷える従者たちを救済する使命をとことん実行し続けている。どうか私たちを見て欲しい。私たちはイエスが生きているというマリアとその他の目撃者たちの証言を聞いたものの、それらの証言がトーマスやその他のイエスに身近だった人々にもあまり変化を及ぼさなかったのと同様に、私たちにも大きな変化を起こしていない。わずか一週間前の先週日曜日に、私たちは熱心に復活祭の良き知らせを聞いて、私たちの感じる喜びが私たちの生き様をあきらかに良くしてくれるのではないかと期待した。しかし、この礼拝堂の壁の外側ではこの7日間に起こっていた事は、むしろ、持続するはずだった変化力から、わたしたちを奪いとってしまったのではないだろうか。たとえ私たちが先週の日曜日に恐れから私たちを解きほぐす何かを感じたとしても、もうそれはどこかに行ってしまったようだ。

それは確かに少々残念なことだ、しかし、考えようによっては私はそれが実際にはそんなに悪いことではないのではないと思う。　おそらく神は私たちにゆっくり時間をかけて信じるということを理解できるようにしているのだろう。　おそらく私たちの全人生をあますところなく御手にゆだねるという、完全な信仰を私たちが持つようになるには、相当な時間がかかるのだと思う。さらにそのような状態に到達するなら、神は私たちがだれかが語った言葉をそのまま受け入れるというようなことを望まないのではないかと思う。　私たちが聖書の中に証人たちの証言を得ているのはもちろん良きことだが、私たちはまさに御言葉を、私たちに常に繰り返し滋養物を与えてくださるイエスの本当の存在を欲しまた必要とする。イエスとの日曜日の出会い、それがたとえ復活祭の大きなお祝いの中でも、それは自分の確信を持ち続けるには不十分だ。わたしたちは、イエスが必要な限り毎週毎週、パンとぶどう酒になってイエス自身がその体と血を与えるために戻って来ようとする思いに頼るようになる。そうすることで私たちは、イエスの愛と恵みが確かなものとなり、世の何かが私たちの確信を粉砕しようとすることが起こっても、イエスは彼独自の方法で、私たちとともにいてくださる。

復活の命に生きる個人として、無分別な暴力や殺人すらもフェイスブックに流すような文化の中に生活することは非常に耐え難いと感じる。しかしながら、あなた方自身がイエスが招いている新しくしてくださる時間をあなた方の魂のなかにどっぷりと漬からせるようにすれば楽になるのではないかと思う。神が望むような存在となるには、なんどもなんども復活の主に会う必要がある。それゆえ信仰の成長を促す恩寵の手段を受け取れる場所に繰り返し集まり続けよう。御言葉の約束の中で、そして赦しの食卓の周りに、定期的に集まろう。そしてあなた方は自分が次の段階にいることに気がつくであろう。それはゆっくりでも、ドアを開けて主のために世に遣わされる弟子になっていくようになり、確かに違う個人になっていく。　アーメン。